

「サバ人のサバ」は消えたのか

— 地方自治、メディア、外国人から見るサバの選挙結果

山本 博之 京都大学地域研究統合情報センター

みなさんご存じのように、サバ州の人は「サバ人」意識が強く、そのためつねに半島部マレーシアの連邦政府とは一線を画すとよく言われてきました。ところが今回の総選挙では、国会、州議会ともに、サバ州では与野党ともに半島部に由来する政党が勢力を伸ばしました。与党BNではUMNO、野党PRではDAPとPKRが議席を増やしました。その裏で、かつてサバ州が掲げていたスローガンである「サバ人のサバ」が少しかたちを変えた「サバの自主権(autonomy)」を掲げる地元政党が大負けしました。

このことだけ見ると、今回の選挙を通じてサバ州では半島部との政治的境界が低くなったように見えます。本当にそのように理解してよいのか、この状況をどう考えればよいのかということが、今日お話ししたいことです。

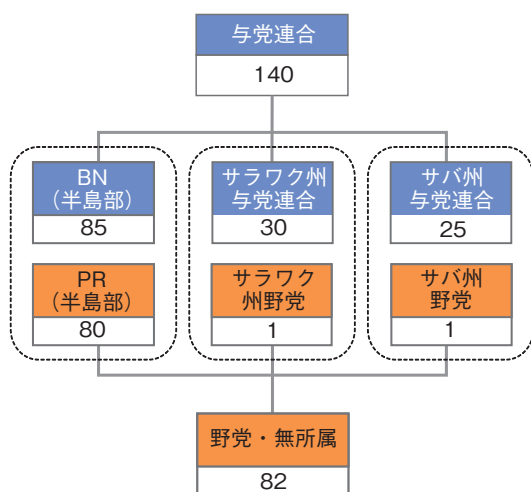
その際に、動画やソーシャル・ネットワーク・サービスといった選挙運動における新しいメディアと、選挙の直前に起こった「スルー王国軍」の兵士侵入事件とそれに関連する領土・外国人問題が、今回の選挙にどのような影響を与えたのかについても考えたいと思います。

■ 政権交代のキャスティング・ボートを握る サバ州、サラワク州

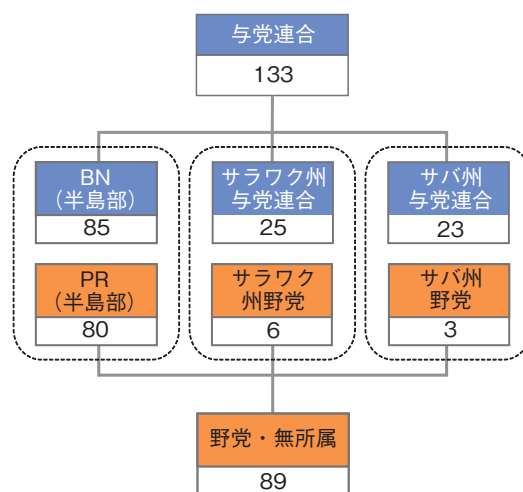
サバ州における今回の選挙の位置づけを理解するために用意した資料28、29をご覧ください。マレーシアの政治は、半島部とサバ州とサラワク州とで切り離されています。政党の成り立ちも争点も違うので、マレーシアの政治を考えるうえでは、半島部は半島部、サラワク州はサラワク州、サバ州はサバ州で見たほうがよいということをまず押さえておきたいと思います。1990年代以降にサバ州と半島部との間の垣根が低くなってきたのではないかという見方については今日の報告全体でお話することにして、まずは三つに分かれているというところから話を始めます。

本日の研究会でもすでに繰り返し言及されている与党連合BNと野党連合PRの対立は、半島部マレーシアで見られるものです。資料28が2008年の選挙の結果で、資料29が2013年の選挙の結果です。半島部を見ると、国会でBNが85議席、PRが80議席で、与野党の議席数はほぼ同じで、少しBNが多いという状況は前回と今回とで変わっていません。

これに対してサラワク州とサバ州では、2008年に



資料28 2008年3月8日の総選挙後の地域別の与野党勢力
数字は開票時の議席数。※サバ州にはラブアン区を含む



資料29 2013年5月5日の総選挙後の地域別の与野党勢力
数字は開票時の議席数。サバ州にはラブアン区を含む

はPRはサラワク州とサバ州で1議席ずつでしたが、2013年にはどちらの州でも議席を増やしています。ただしBNの議席のほうが多いので、マレーシア全体ではBNが国会の過半数の議席を占めています。

サバ州とサラワク州の政治は半島部と切り離されているので、状況が変われば、州全体でBNからPRに寝返ることも十分考えられます。国会の議席数はサバ州よりサラワク州のほうが多いので、サバ州だけがまともってPRに移っても連邦全体での与野党の逆転には数が足りませんが、サラワク州がまともってPRに寝返れば連邦全体で与野党の勢力が逆転するという重要な位置に、サバ州とサラワク州とがあります。

「マレーシアのなかのサバ」および「サバの民族構成」については詳しく説明する時間の余裕がありませんので別の機会にお話ししたいと思います。簡単に言えば、サバはマレーシアのなかの半独立国のようなもので、サバの住民は半島部とは違うムスリム原住民、カダザンドゥスン人、華人の三つの民族から構成されています。

連邦・州関係では、1963年のマレーシア結成当初は半島部とサバ州は相互不干渉の態度をとっていましたが、州の権利を掲げるサバ州と連邦政府が対立する時代を経て、1994年以降はサバ州が連邦政府の指導下に置かれていると言えます。

■ サバ州政治の画期となった2003年の変化 ——「1人政党」の増加と州首相輪番制の廃止

サバの政治では、2003年がいろいろな意味で画期となりました。まず、1990年の総選挙を契機に半島部に由来するUMNOやMCAがサバに進出して、サバBNを組織しました。

サバBNはUMNOを中心に半島部由来の政党やサバ州の地元政党が複数集まったものですが、2003年にサバBNはUMNOと「1人政党」の集まりになりました。「1人政党」というのは、私が付けた名前です。国会議員あるいは州議会議員が1人だけいて、それ以外には議席がない政党です。

たまに2議席ある政党もありますが、ほとんどは党首が1人で党の看板をはっています。党内に有力者が2人になると、その2人が党首の座を争い、負けた側が支持者を引き連れて離党し、名前だけで休眠状態だった別の政党に移り、今度はその政党が「1人政党」になります。カダザンドゥスン人政党にも華人政党にもあり、五つも六つもあって、それがUMNOと連立してBNを形成していたのがサバBNの姿です。

2003年の変化はいくつかあります。まず、オール与党体制になりました。1994年のBN政権の成立によって、それまでの州与党だったPBS(サバ団結党)はBNの外で野党として存続してきましたが、2003年にPBSがBNに加入し、サバ州はオール与党体制になりました。これによって、サバBNではUMNOが圧倒的に大きく、その次がPBSで、それ以外は「1人政党」となりました。

2003年の変化の二つ目は、州首相の輪番制の廃止です。1994年以来、州首相はムスリム原住民、カダザンドゥスン人、華人の3民族から2年ごとに出すことになっていました。しかし2003年からは、「今後は州首相はUMNOから出せばよい」ということとなり、輪番制は廃止されました。

また、実施は2004年の選挙からでしたが、2003年の変化として、48選挙区だったサバ州の選挙区割りが増えました。これに伴って、BN構成政党の勢力関係に大きな変化が生じました。それ以前のBNには、「どの政党も単独で過半数となるようにはしない」という了解があり、最大政党のUMNOも48選挙区のうち最大24選挙区までしか候補者を立てていませんでしたが、2004年にはUMNOが60選挙区のうち32区で公認候補を立てることを認めさせました。仮にUMNOの候補者がすべて当選したとしたら、UMNOは連立を解消して単独で政権をとることもできる状況になりました。

■ SAPP、STAR、PRの野党3陣営が ほぼすべての選挙区に独自候補を擁立

野党については、大ざっぱに言うと、今回の選挙でサバでは三つの陣営が出てきました。野党も基本的に1人政党です。政党名ではなく人名で言った方がわかりやすいので人名で言うと、一つは、州首相経験者の華人のヨン・テックリー(Yong Teck Lee)のSAPP(サバ進歩党)です。前回の選挙ではSAPPはBNに所属していましたが、選挙後にBNから離脱して連邦・州ともに野党になりました。今回の選挙ではPKRと連携したためにPRに入るかと思われましたが、最終的に、半島部の政党とは組まずにサバ州のすべての選挙区に独自の候補を立てて、単独で選挙戦に臨みました。

次がジェフリー・キティンガン(Jeffrey Kitingan)というカダザンドゥスン人の政治指導者の党です。州首相経験者であるPBSのパイリン・キティンガンの弟です。前回の選挙はPKRと連携しましたが、今回はPKRと組まず、STAR(州改革党)という党を作ってサバ州

のほぼすべての選挙区に独自候補を立てました。

この二つのほかに、BNの構成政党から離党して1人政党を作り、PKRに合流した人たちもいます。ムスリム原住民政党のUMNOから離党したラジム・オキン (Lajim Okin) はPPPS (サバ改革連盟組織) を結成し、カダザンドゥスン人政党のUPKO (統一全国パソモモグン・カダザンドゥスン・ムルト組織) から離党したウィルフレッド・ブンブリン (Wilfred Bumburing) はAPS (サバ統一戦線) を結成しました。今回の選挙では、PPPSとAPSはそれぞれPKRのシンボルのもとで立候補したため、統計などのうえではPKRの候補者としてカウントされます。PKRはDAPやPASとともにPRを組織しました。

このように、野党はSAPP、STAR、そしてPKRを中心とするPRの3陣営が出てきました。これに加えてBNの候補者もいるので、サバではほとんどの選挙区で4人の候補者が立ち、さらに無所属候補を入れると5～7人の候補が立ちました。

■ 2013年総選挙の争点① — 外国人増加とスルー王国軍兵士侵入事件

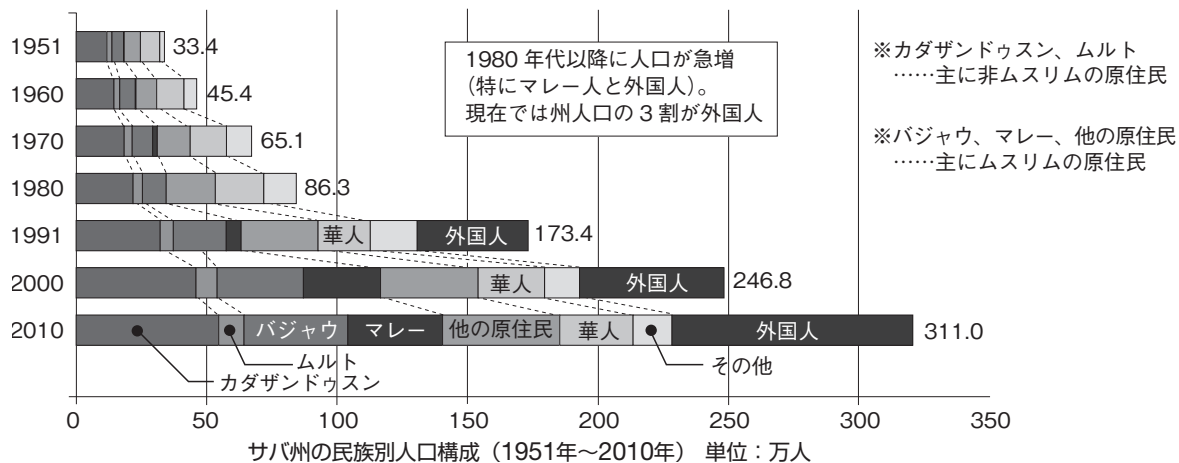
今回の選挙の主な争点は三つあります。一つは「外国人の増加と国境警備」です。これはサバでは1980年代から長く続く、サバの人びとにとって深刻な問題

です。資料30を見てください。上のグラフはサバの民族別の人口の実数で、1951年から2010年までの数値があります。下の表はそれぞれの割合です。

下の表の「カダザンドゥスン人」を見ると、1951年にはサバの総人口の約3割を占めており、1960年でも3割弱でした。しかしその比率はだんだん減って、2010年には17.6%にまで落ちています。ところが、上のグラフで実数を見ると、カダザンドゥスン人は1951年から2010年まで増え続けています。実際の数が増えているのに割合が減っているということは、それ以外の部分が急激に増えているということです。下の表を見ればわかるように、急に増えているのはマレー人と外国人です。どちらも1991年から増えています。

マレー人は、1950年代から70年代まで0.6%、0.4%、2.8%でしたが、1990年代以降は3.3%、12.0%、11.7%と急増しています。12.0%と11.7%だと割合はほぼ同じだともうかかもしれませんが、母数が増えているため実数はかなり増えています。外国人は、1991年以降、24.5%、22.4%、最近では30%を占めています。

マレー人と外国人の人口が増えているのは、1980年代に、連邦ではマハティール・モハマドが首相、サバ州ではハリス・サレー (Harris Saleh) が州首相だったとき、有権者のうちのムスリムの割合を増やすため



サバ州の民族別人口構成 (1951年～2010年) 単位: %

	1951	1960	1970	1980	1991	2000	2010
カダザンドゥスン	35.3	31.9	28.3	25.3	18.6	18.6	17.6
ムルト	5.7	4.8	4.8	4.2	2.9	3.3	3.1
バジャウ	13.5	13.2	12.0	10.5	11.7	13.4	12.8
マレー	0.6	0.4	2.8	-	3.3	12.0	11.7
他の原住民*	18.6	17.4	19.4	21.8	17.0	15.2	14.4
華人	22.2	23.1	21.4	21.6	11.5	10.3	9.0
その他	5.4	10.8	14.7	14.4	10.4	5.4	4.8
外国人	-	-	-	-	24.5	22.4	29.7
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

※「他の原住民」の内訳
(1970年、単位: 万人)
クダヤン (3.8)、スンガイ
(1.8)、ピサヤ (1.4)、スルック
(1.1)、ティドン (0.8)、
サイノ (1.0)、その他 (2.8)
サイノ (華人との混血者) 以
外はムスリム

資料30 サバ州の人口構成と民族

に、インドネシアやフィリピンから来た外国人に、適切な手続きを経ることなくマレーシア国民としての身分証明書を発給したためだと見られています。そのため、不正な身分証明書発給について連邦政府に正式な調査を求める声は、1990年代からずっとあがっていました。

とくに、1990年代に「サバ人のサバ」を掲げて連邦政府と対立したPBSは、外国人への身分証明書の発給について調査するよう連邦政府に求めています。PBSとその後継者たちは1990年代から今日までずっと連邦政府に訴え続けてきましたが、連邦政府の答えはいつも「調査しない。関係ない」というものでした。

ところが、2012年6月にナジブ首相が、「外国人人口増加に関する王立調査委員会」を突然に設置しました。マレーシアでは王立の調査委員会は重みをもつと考えられています。調査するだけで、取り締まり罰則を与える権限はありませんが、この委員会の調査によって「正規の手続きではない方法で身分証明書を与えた」という証言が出てきました。サバの人びとは、「やはりそういうことがあったか」と思い、かなり満足したという言い過ぎかもしれませんが、これで気が晴れて納得したところがあったように思います。

もう一つのポイントは「スルー王国軍兵士」の侵入事件です。必要ならばあとでもう少し詳しくお話しますが、事件自体はこれまでもしばしばサバ州の東海岸で起こってきたことで、フィリピン側から船で人が渡ってただけでした。ときどきまちを荒らして金品を奪っていくことがあり、サバの人びとは今回も「またいつもと同じだろうな」と思っていたようです。ところが、今回はそれがずいぶん大げさな話に発展して、ついには連邦政府が警察と陸海空軍を導入して、大規模な掃討作戦を行ないました。

圧倒的な軍事力の違いがありながら「兵士」たちを包囲して殲滅しようとする連邦政府の対応はひどいと思いますが、これによって、結果としてサバ州の人びとは、「これまでさんざん『国境警備や外国人問題に対応してくれ』と言ってもらえなかった連邦政府がようやく本腰を入れて対応してくれた」と考えました。そのため、サバの人びとが1990年代以来ずっと問題としてきたものが解消に向かって動き出しました。実際に国境警備や外国人問題がどうなるかは未知数ですが、サバの人びとの意識のうえでは根底にある問題がとんでしまったようなところがあります。

■ 2013年総選挙の争点②

—— ブギス人によるサバ進出への反発

他の争点はサバのローカルな話で、一つはブギス人のプレゼンスの問題です。サバ州のムスリムにはいろいろな民族がいて、最大多数派はバジャウ人了。彼らはフィリピンの人びとともつながりがあって、フィリピン系と見ることもできます。もう一つの大きなグループとして、ブギス人がいます。マレーシア国民ですが、家族・親戚などを辿るとインドネシアとつながりがある人たちです。

サバではこれまで長く、州首相や州元首にはバジャウ人が就いてきました。ところが、2003年にUMNOが州行政のトップになってからは、ブギス人の進出が目立つようになってきました。

ブギス人は、はじめにサバの陸上交通、タクシーやバスを押さえました。最初のうちは、「交通を全部ブギス人が押さえているから、たいへんになったな」と半分冗談で言っている程度でした。ところが、交通を押さえるということは流通も押さえることになるので、数年後には、たとえばコメなどの食糧品を運ぶときにブギス人の意向が強く反映されるようになって、「ちょっと困った」という話になってきました。

その後、ブギス人の進出はさらに進んで、土地測量局のかなり高い地位にブギス人が就いて、アブラヤシ農園に転用できそうな土地をブギス人たちに払い下げていると言われています。まだ確認はできていませんが、交通から流通へ、さらに土地へと勢力をひろげたことで、ブギス人へのかなり強い反発も出てきました。10年くらい前から少しずつ増えてきたのだと思いますが、土地問題にまで行き着いたため、ブギス人への反感が大きくなった印象があります。

■ 2013年総選挙の争点③

—— UMNOによる支配への批判

もう一つの争点は、UMNOによる支配です。先ほど、2003年以降にUMNOが過半数の選挙区で公認候補を立てることになったと言いました。それに加えて、本来ならばBNの構成政党どうしは相互不干渉のはずですが、今回の選挙ではUMNOが他のBN構成政党の公認候補選に介入しました。

PBSが公認候補のリストを作成したところ、公認から漏れたPBS黨員と親しいUMNO黨員がBNの総裁でもあるナジブ首相のところに行き、ナジブ首相からの指示というかたちでPBSの公認候補者を変えてしまうことができました。他党の公認候補を変えさせ

るのは度を越した介入だという批判が起こりました。

このように、ブギス人による独占やUMNOによる支配の問題が重なり、カダザンドゥスン人と華人のあいだに「UMNOが統治しているかぎりサバの状況はよくなる」という感覚が共有され、今回の選挙では多くの選挙区でカダザンドゥスン人と華人が手を結ぶようすが見られました。

これまでは半島部の政党とは結ばないという考え方が強かったため、政権党に批判的な勢力はサバ州の地元政党として野党を立てるしか選択肢がありませんでした。今回は半島部の野党と組むという考え方が受け入れられ、PKRやDAPと組む人たちが出るようになりました。

■ サバの選挙運動の特徴 ― 消えた意見広告看板、新聞の強い影響力、ITを活用したチェラマ

選挙運動に関して、今回見られた特徴を三つ紹介します。マレーシアの選挙では各党が旗と候補者の看板を町じゅうに立てることが知られていました。サバもちろん例外ではなく、前回の選挙までは各党の旗だけでなく意見広告のような看板がたくさん立てられていました。しかし、今回の選挙では、各党の旗はありましたが、意見広告のような看板はほとんど見られなくなりました。町では見られなくなりましたが、フェイスブックなどに場所を移して、インターネット上では数多く見られるようになりました。

ただし、すべてがインターネットに移ってしまっただけではありません。サバは半島部マレーシアの「常識」が通じなくておもしろいところがたくさんありますが、その一つに、半島部だと主流メディアがすべて与党系なので新聞・テレビはどうせ政府に都合のいいことしか書かないのが当たり前になっていますが、サバでは各陣営に近い新聞や中立的な新聞があるため、新聞を3紙、4紙読むと、与党の立場に近いものも野党の立場に近いものも出てきます。

今日の研究会の休憩時間に上映したのは、今回の選挙で野党支持者たちが作ってインターネットなどで公開している動画です。そこでも「新聞にこう書かれてしまった」「新聞にこう書かれているけれど、自分たちはそれと違う情報をもっている」という台詞があり、新聞をかなり気にしているようすが見てとれます。しかも、それを新聞以外のところで議論しているということです。戦いはインターネット上で熱く繰り広げられていますが、新聞がなお強い力をもっていることも確かだと思います。

チェラマに関しては、動画などの情報技術の活用が目立ちました。チェラマの演説は録画し、おもしろいと思ったものは翌日にはインターネット上で公開しています。そうすることで、自分たちが世界の人びとに見られているという状況を作る、あるいは、チェラマを通じて他の政党と議論するという姿が見られます。

ある政党のチェラマでは、「よその政党のチェラマに行ったら、自分たちの批判をこのようにしていた」と自分たちのチェラマで話して、それをインターネット上で公開したりしています。直接の対話というわけではありませんが、チェラマの録画をインターネット上で公開することを通じて対話していることが興味深く感じられました。

■ 第二党だったPBSは惨敗し UMNO、PKR、DAPが躍進

選挙結果については、細かいデータは省略しますが、カダザンドゥスン人が多い選挙区ではPBSが大負けして、選挙前は第二党だったPBSが事実上の1人政党になってしまいました。カダザンドゥスン人を主要支持基盤とする政党でPBS以外のものはどれもほぼ1人政党でしたから、カダザンドゥスン人政党はほとんどすべて1人政党になりました。

華人が多い選挙区では、華人主体の政党であるMCA、LDP(自由民主党)、Gerakanは前回選挙からすでに1人政党になっていました。ムスリム原住民区ではUMNOがほぼすべて勝ちました。そのため、与党ではUMNOが半分くらいの議席を得て、あとはすべて1人政党になって衛星のようにUMNOと連携しているかたちとなりました。

野党に関しては、カダザンドゥスン人選挙区と華人選挙区とでPKRとDAPとがそれぞれ議席を伸ばし、野党としてはPKRとDAPが議席を増やしました。これまでサバでは半島部の政党であるPKRとDAPが議席をとることはほとんどありませんでした。DAPは国会と州で1議席ずつもっていた程度で、PKRとPASの議席はありませんでしたが、今回はPKRとDAPが連邦・州のいずれでもかなり多くの議席を取りました。

■ 半島との垣根は低くなったのではなく サバという枠組みは依然として意味をもつ

これをどう考えるのか。一見すると、「UMNOの優位の確立」と「半島部野党のサバ進出」と言えるように見えます。ただし、もう少し詳しく見ると、与野党と

もに、サバ州内で勢力を維持・拡大しようとして半島部の勢力を利用すると見ることができます。UMNO側は連邦政府の後ろ盾を使い、それに対抗する側はPKRなりDAPなりを利用して、サバをなんとかするために半島部の政党とつながろうとしています。

したがって、半島部の野党がサバに進出したり、半島部に基盤を置くUMNOが優位を確立したりしたことは、サバと半島部との政治的な垣根が低くなったのではなく、サバという枠組みは依然として意味をもっていて、サバをなんとかするために半島部の政党とつながったり利用しようとしたりすると考えるべきです。

■「サバ人のサバ」、「サバの自主権」という思想はどのように継承されるのか

残る問題は、「サバ人のサバ」あるいは「サバ自主権」のゆくえです。「サバ人のサバ」は1990年代にPBSが訴えていたスローガンです。PBSはサバのすべての民族を包括する多民族政党で、「サバ人のサバ」を訴えて連邦政府と対峙していました。これに対して連邦政府は強硬姿勢を取り、PBSから州政権を奪うため1991年に半島部の政党がサバに進出しました。

しかし、2003年にPBSがBNに入ったことにより、PBSが掲げていた「サバ人のサバ」は事実上棚上げになりました。さらに、民族政党の連合体であるBNに入るということは自らが民族政党であると認めるとのことなので、サバのすべての民族を包括する政党だったはずのPBSは、BNに入ることによって事実上カダザンドゥスン人政党になったと見られました。しかも、今回の選挙の結果として1人政党になってしまったため、1990年代に「サバ人のサバ」を掲げて連邦政府と正面からやり合っていた力強いPBSは、この選挙をもって歴史的役割をほぼ終えたと言えるように思います。

「サバ人のサバ」という考え方がどう受け継がれていくのか、あるいは受け継がれないのかについては、今回の選挙ではSAPPが「サバの自主権」を掲げており、ここに「サバ人のサバ」の考え方の継承の可能性が見られると思いました。SAPPは、先ほどヨン・テックリーの政党として紹介した政党です。ヨン・テックリーはもともとPBS党員で、1994年にPBSから離党してSAPPを作りました。今回、サバでは各政党がBNとPRに分かれましたが、SAPPはBNとPRのどちらとも組まず、「サバの自主権」を訴えました。

SAPPは党首のヨン・テックリーが華人なので都市

部の華人を主要支持基盤とする政党だと見られがちですが、そのように色を付けて見られることを避けるためにサバ全州に支部や党組織を作り、非華人の候補者を立てたりしています。また、選挙運動では、IT技術を駆使して、動画を含めてさまざまな新しい技術で自分たちの主張を訴えています。そこで身につけた新しい技術は政党を離れても使えるため、若い人たちを対象とした後継者育成という意味ももっていると思います。

SAPPは、半島部出身の政党と組まずに独自路線を維持し、サバ州内の民族や世代を横断した連帯を育ててきました。そのため、PBSは歴史的役割をほぼ終えたけれど、それがSAPPに伝わって、別のかたちで「サバの自主権」となったのかと思っていました。しかし、残念ながら、今回の選挙でSAPPは国会、州ともに獲得議席がゼロとなりました。サバの人びとは一度負けた政党には厳しいので、今後はSAPPが国会や州議会で勢力を拡大することはほとんどないでしょうから、SAPPを通じた戦いもこれで終わりに近いのかと思いました。

■ マレーシア結成史の研究が現在の政治に直結する可能性

サバでは、マレーシアのなかでサバがどのような位置づけなのか重要な話題として熱く語られることがあります。今年はサバが1963年にマレーシアを結成して50周年に当たります。「50年前にマレーシアはどのような議論をしてどのような条件で結成されたのか、それをあらためてマレーシア全体で考え直すべき」ということをサバの人は考えています。

ただし、マレーシア結成は若い人たちが生まれる前の話なので、正確な情報はあまりありません。その意味で、歴史研究が現在の政治に直結することがありうるのだと改めて思いました。